



ア
メ
リ
カ
童
話
か
ら
3

松原 至 大

3 星 と 人 魚

あるところに、子供の人魚ヒナメがいました。この人魚は岸邊に泳いできて、手の指をぼちやぼちやさせるのが好きでした。だれも見えていない時ですよ。でも、足の指がないのですから、それをぼちやぼちやさせることはできませんでした。その代りに、きらきらとした緑の尾がありました。長い金色の髪を持つていて、太陽のあたる岩の上にすわつてよくそれを、くしけすつていることもありました。

この人魚は、とてもいたずらなやうでした。お友だちの小さな人魚をいじめたり、水母クラゲに海藻をぶつけて驚かしたり、かにかのごちそうに胡椒こしょうをふりかけたりしました。ですから、この人魚の姿を見ると、みんな逃げてしまつて、いつしよに遊ぶものはいなくなりました。

この子は、悲しく思いましたが、それを口に出しませんでした。それどころか、自分はいつとも楽しいような顔をしていました。ひとりでごつごつした岩の上にすわつて、歌をうたつたり、岩の間のプールに、小石を投げこんだりして、なにか海の動物が、頭でも出してくれればよいと思つていました。

けれど海の動物たちは、少しも動きませんでした。この人魚が、自分たちをいじめようとして、待つてゐるのを知つていたからですよ。みんなひつそりとしていたので、人魚は、どこかへ引つこしたのか、それとも、わたしにだまつて、ピクニックにでも行つたのかと思ひました。そこで、前よりもさびしくなりました。だが、さびしくないようなふりをしていました。そのうちに、おひるも過ぎて、太陽もしずみ、星が空にきらきらと輝きはじめました。

人魚は、もうすつと前に、お床へはいらなければならなかつたのに気がつきました。きつとばあやが、あたりを泳いで、さがしまわつてゐることでしょう。おとうさんとおかあさんが、心配しておいででしょう。すぐにもお家へ歸

らなければいけないことを、この人魚はよく知っていました。それなのに、そうしないのです。ますますやんちゃやになつて、歌をうたつていました。

この人魚は、今日までに、こんなにおくまで、外にいたことがないのです。星をながめたのは、初めてなのでした。きらきらと星がまたたくと、うれしさのあまり手をたたきました。

「おりておいで。おりてきて、わたしと遊んでちょうだい。わたし、糸でつないで首かざりと冠かんむりが作りたいわ。貝がらよりも、すつときれいよ」

人魚は、いつかばあやに聞いた海の上の高い空にかがやく光のこと、それを星ということなどを思い出しました。そしてそれが、ほしくてならないのでした。

そのうちに人魚は、空の暗いところにはなれて、ひとりできらきらとしてゐる小さな赤ちやん星を見つけました。人魚にとつては、これが特別大きく、美しいもののように見えました。

「おりておいで、小さな星さん、わたしと遊んでちょうだい。わたし、あなたに岩とプールを見せてあげてよ」と、人魚がいました。

「ほく、ほく、こわいや。ほくいそがしいんだよ」と、その星は答えました。

「あなた、きらきらするだけじゃやないの。そうやつて始終、きらきらしていなくとも、いいんでしよう？」と、人魚が口をとがらせました。

「空にゐるのには、こうやつていなければいけないんだよ。とにかく、君はおやすみしなければいけないんだよ」と星がいました。

「星さんはずいぶん大勢ゐるから——あなたひとりぐらい、大丈夫よ」と、人魚がさそいました。

「でも、ほく、用があるんだよ。君はそこで、なにかしなければならぬことはないの？」

「わたし、お家へ歸らなければならぬのよ」と、人魚はいいやながら答えました。

「なら、なぜ歸らないの？」

「そうよ、わたし、歸るわ。けど、その前に、あなた、おりていらしつて、プールにお顔をうつして御らんなさいよ。あなた、御自分がどんなにきれいなのか、御存じないのよ」と、人魚はいました。

小さな星は、前の方へ身體をさしのばしましたが、自分の姿は見えませんでした。「もつとこつちへ」と、人魚が大きな聲でいいました。

星は、だんだん空から身體をさし出しました。とうとう身體のつり合いを失つて、ころび落ちました。後に長いきらめきを残して、落ちて行くのです。やがて、ものすごい水のはねる音がしたかと思うと、星はプールの中にはいりました。

人魚は、よろこびの叫び聲をあげました。

「さあ、わたし、あなたをかざり玉にできるんだわ」と、うれしそうに言いました。

人魚はプールのところへ行つて、星を拾いました。けれど、水の外に出すと、星の輝きは、みんな消えていました。それはつまらないピンクの石で、人魚がつけている首かざりの貝にもおよばないものでありました。

人魚はがつかりして、それをプールの中に投げ捨てて、お家へ泳ぎかえりました。

「こんなさびしい日は、今までになかつたわ」と、人魚はため息をつきました。「明日は、あんなつまらない星なんかをとらないで、お友だちともつと面白く遊ぼうつとー」

しかし、小さな星は、幸福に思いながら、プールを一まわりしました。自分が空できらきらと輝いていたことを、もう忘れていたのでした。

ところで皆さん、御存じですか？　これがあの濱邊にある、ひとでの始まりだということですよ。

(ヒヤ・フローレンス・ブツシュ女史の作による)